

---

# アイーダ

坂田火魯志

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
アイーダ

【Nコード】  
N0313G

【作者名】  
坂田火魯志

【あらすじ】  
エジプトの若き名将ラダメス。彼は祖国の栄光を受けエチオピアとの戦いに向かう。その彼をひそかに想う奴隷女アイーダ。だが彼女は実は宿敵エチオピアの王女だった。ヴェルデイのオペラを小説にしました。国家の間で揺れ動く愛のお話です。  
こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.painwest.net/>

## 第一幕その一

### 第一幕 勝利と愛と

古代エジプト。エジプトは長い間エチオピアと争ってきた。古くからある国同士でありその争いの歴史も長かった。その戦いはこの時も行われていた。

石造りの神殿の中だった。白い壮麗な石が神殿を造っていた。今そこに厳しい顔の大柄な男がエジプトの貴族の服を着た逞しい男を前にして語っていた。

「いよいよだ」

その大柄な男は髪のかなりの部分を剃っていた。当時のエジプトの風習に従ってのことである。それから彼が神官であることがわかる。エジプト社会においてファラオを補佐し大きな力を持っていた神官であった。

「信託が下った」

「遂にですか、ランフィス様」

「うむ」

その神官ランフィスが応えた若者は雄々しく彫のある顔をしていた。背は高く黒い髪に髭のない顔が実に端整であった。黒い目は強い光を放ちその上半身は実に逞しい。誰もがうっとりとするような美男子であった。周りの石の柱にも負けてはいない力強さがそこにはあった。

「エチオピアが来た」

「またしても」

「ラダメス將軍」

ランフィスは彼の名を呼んできた。

「はい」

ラダメスのそれに応える。その力強い目で彼を見ていた。

「エチオピア軍が目指しているのはこのメンフィス」

「またしてもですか」

一度や二度ではない。エチオピア軍は何度もテーベを目指して攻め上がってきているのだ。この時のエチオピアの首都はテムンフィスであった。彼等はそのを常に狙っていたのだ。

「そうだ、懲りずにな」

「では懲罰を与えてやりましょう」

ラダメスは強い声で述べてきた。

「我等がメンフィスを汚さんとする者達に」

「イシスは命じられた」

「エジプトを守る将を」

「そうだ、それもまた伝えられる」

ランフィスはラダメスをじっと見据えて述べてきた。

「名誉を与えられた者の名が」

「その者は幸せであります」

「確かに」

ランフィスはその言葉に笑みを浮かべた。そのうえでまたラダメスを見てきた。

「將軍」

そのうえでまた彼に声をかける。

「その者は若く、勇ましい者」

「勇者ですか」

「エジプトが誇る勇者だ。太陽であるラーを守るセトやトトのように」

セトは邪神であるとされることも多いが本来は太陽神ラーを守りコウノトリの頭を持つ神トトと共に闇の大蛇アピプと戦う存在であったのだ。その頭は奇妙な動物であるがジャツカルではないかと言われることもある。ランフィスはその強力の神々の名を出してきた。それにもある意味を含んでいた。

「まさに勇者だ」

「その勇者がエジプトを、ファラオを守る」

「では私はこれでな」

「ファラオの下にですね」

「そうだ」

きっぱりと彼に告げた。

「神の御意志をお知らせに行く。それではな」

「はい」

ランフィスは去りラダメスは一人になった。ここで彼は一人呟くのであった。

「若し私とその戦士であつたならば私の夢を適えることができる  
そう言った。

「勇者達を率いるさらなる勇者となり勝利を得れば栄光は思いのまま  
まだ」

だが彼はここで栄光を見てはいなかつた。他のものを見ていたのだ。

「そしてアイーダ」

一人の女の名を呟いた。

「そなたに告げたい。そなたの為に勝つたのだと」

想っている者の名を呟くとその姿が思い浮かぶ。それは彼にとつ

ては女神のようであつた。

## 第一幕その二

「麗しい女神のような清らかなアイダ、光と花で飾られたようなそなたは私の想いの全てなのだ、命の輝きそのものなのだ」

こうまで言う。

「勝利を収めたならばそなたの祖国の地と美しい空を返してあげたいものだ。王家の髪飾りも玉座もそなたの為にあれば。どれだけいだろうに。アイダよ」

そのアイダのことをただ想うのであった。想いながら神殿を後にする。

遠くにピラミッドが連なって見える。もう夕刻であった。夕陽の中にピラミッドが連なっていた。王の墓である。他には神殿や見事な石の館も見える。メンフィスの街は実に見事であった。

今彼がいる神殿の入り口も同じだった。神の彫像や花で飾られている。その前にいるとそこにみらびやかな白い服を着て黒く長い、ナイルの波のように美しい髪をした女が静かにやって来た。

「王女様」

「將軍」

ラダメスは彼女の前に来て畏まって片膝をついた。その王女は勝気そうな強い目をしていて高い鼻を持っていた。背はそれ程ではないのに強いオーラを放ち周囲を圧していた。その目は黒い、ブラツクルビーの目をしていたがその周りにエメラルドの化粧をしている。口は大きく綺麗な形をしていた。彼女がエジプトの王女アムネリスであった。

「ここにいらしたのですね」

「はい」

ラダメスは頭を垂れたまま王女に答える。

「お話していたのはイシスの大神官殿です」

「その通りです」

ラダメスはまた答えた。

「そうですか。將軍」

「何でしょうか」

「エチオピア軍がここに近付いているのは御存知ですね」

「ええ」

アムネリスの言葉に頷く。その時顔を上げたが慌ててまた垂れた。

「失礼」

「いえ」

だがアムネリスはそれを許してきた。

「構いません。いえ、お立ちなさい」

「宜しいのですか？」

「エジプトの誇る勇者を跪かせるわけにはいきません」

そう言つてラダメスを見た。その目は何処か熱いものがあつた。

「ですから。よいですね」

「はい。それでは」

ラダメスはその言葉に頷いた。それからまた述べた。

「お言葉に甘えまして」

立ち上がつてきた。そうして神殿の前でアムネリスと向かい合つ

たのであつた。

「それで將軍」

アムネリスは立ち上がったラダメスにまた声をかけてきた。

「その勇者はおそらくエチオピア軍を破ることになるでしょう」

「はい」

ラダメスはその言葉にも頷く。

「間違いなく。勝利の栄光を手に入れられるその者は幸福でありま

す」

「欲しいものは思いのままです」

「そうですね」

「そう」

ここでまた思わせぶりにラダメスを見てきた。

「全てが。思いのままなのです」

「それでは」

「名誉も富も。そして」

アムネリスは今自分が言う言葉に思わず息を飲んだ。だがそれでも言った。

「愛さえも」

「愛さえも」

「そうです」

また熱い目でラダメスを見やった。



### 第一幕その三

「おわかりですね、本当に何もかもが」  
「ええ」

（では私はやはり）  
心の中で呟いた。

（アイーダを）

（私の気持ち。気付いていないのね）

アムネリスはそつと彼から視線を離して俯いた。それを思い悲しくなる。

（どうしてなの）

（この方の側にいる彼女に）

二人はそれぞれ違うことを想っていた。それが二人を苦しめていた。

（伝えることができれば）

（若しかして他の女を。まさか）

ここで誰かが来た。黒人の女だった。

見れば侍女の服を着ている。小柄で綺麗な目に縮れた黒髪を持っている。琥珀の大きな目がそこにありその姿はまるで黒い花のようであった。その彼女がここにやって来たのだ。

「王女様」

「アイーダ」

アムネリスはその侍女の名を呼んだ。

「どうかしたの？」

「ファラオが御呼びです」

「お父様が」

「はい」

アイーダは静かに答えた。

「すぐに来て欲しいとのことですよ」

「アイダ」

「!？」

アムネリスはここでラダメスがアイダの名を口にするのを聞き逃さなかった。そして彼がじつと彼女を見詰めていることも見逃さなかった。

それですぐにわかった。彼が誰を想っているのかを。

アイダを見据える。しかしそれを口には出さない。あえて優しい声をかけてきた。

「おいでアイダ」

顔もにこやかなものにさせてきた。

「私のところに」

「ですが私は」

アムネリスの誘いに戸惑った顔を見せてきた。しかしアムネリスはまた言った。

「貴女は奴隷でも侍女でもないわ。前に言ったわね」

「え、ええ」

その言葉にこくりと頷く。

「貴女は私の妹よ。ただ一人の可愛い妹なのよ」

「妹ですか」

「そうよ」

穏やかな声でまた言った。だが次第に感情が昂ぶってきていた。それを抑えることは無理であった。

「それで今ね」

「何かあったのでしょうか」

「貴女の祖国のことよ」

そうアイダに対して述べた。

「エチオピア軍がここに来ているの」

「えっ」

その言葉に顔を青くさせる。

「エチオピア軍が」

「そうよ。それで」

目が自然と険しいものになる。その目でさらに述べる。

「貴女が心配なのよ」

「私が」

「若しここがエチオピア軍の手に落ちればどうなるのかしら」

(その時は)

アイーダは無意識のうちにラダメスの方を見た。ラダメスもまた。アムネリスもまたそれを見逃さなかった。

「愛しい人がいなくなってしまうわね」

「はい」

アムネリスのその言葉にこくりと頷く。

「確かに」

「そうならないか気懸かりなの」

口ではそう述べる。

「貴女がね。けれどよく考えれば」

言葉に罫を含ませてきた。アイーダにもラダメスにも気付かれな  
いように。

「貴女の祖国はあのエチオピア。だから愛しい人もいない筈ね」

「は、はい」

一応はそう答える。だがその目はやはりラダメスを見ている。

「そうです」

(けれど)

そうは言ってもその目はやはりラダメスしか見えない。相変わらず彼を見ていた。

## 第一幕その四

(エチオピアに帰りたい。けれど)

(言うことはできない)

ラダメスもまた懊悩の中にあつた。心の中で呟く。

(これだけは)

(間違いはないようね)

アムネリスもそれは同じであつた。

(アイーダはやはりラダメスを。けれどまだ確信するには)

早いと。自分に言い聞かせていた。そこに今度は兵士の一人がやつて来た。畏まってアムネリスの前に跪いてきた。

「どうしました？」

「ファラオが御呼びです」

「お父様が」

「はい、どうかいらして下さいとのことですよ」

「わかりました。それでは」

「將軍も」

「私もか」

「はい、宜しいでしょうか」

「うむ」

彼は兵士の言葉に素直に頷いてきた。

「わかつた。それではな」

「はい。それでは」

「アイーダ」

アムネリスは穏やかな顔に戻つてアイーダに声をかけてきた。

「ついて来なさい。いいわね」

「わかりました」

アイーダはその言葉にこくりと頷く。そうしてそのままアムネリスについて王宮まで向かつた。巖かで様々なレリーフで飾られてい

る王宮の中を進む。まるで巨大な神殿のようであるがこれはファラオは神の子とされてきたからだ。この時のエジプトはファラオを頂点とする神権国家なのであった。

玉座の前につく。するとそこには多くの神官や大臣達を従えたファラオがいた。厳かな冠を被り玉座に座っている。そこからアムネリス達を見下ろしていた。

「来たな」

「はい」

アムネリスは片膝をついて父であるファラオに述べてきた。

「お待たせしました」

「よい。では」

「わかりました」

それに従いアイダを従えてファラオの左右の列に加わった。そこにはラダメスも入った。

「さあ、話すがいい」

「はっ」

ファラオの言葉に従い一人の将校が姿を現わしてきた。彼は一礼してから報告をはじめた。

「エチオピア軍が北上していきっております」

その将校はそう告げてきた。

「エジプトの神聖な領土に入りそこで勇敢な我が軍と戦いを繰り広げています。今エジプトは危機を迎えております」

「何と」

それを聞いた大臣の一人が驚きと怒りの声をあげてきた。

「このままではテーベも危ういぞ」

エジプトの南にある街だ。首都メンフィスと並ぶエジプトにとって重要な街である。

「どうする？」

「いや、待て」

ここで神官の一人が言ってきた。彼等の中にはランフィスもいる。

「まだ聞きたいことはある。敵の指揮官だ」

神官はここに注視してきた。

「誰だ、敵軍を率いているのは」

「はい、アモナス口王です」

使者はそう答えた。

「何と、王自らか」

「そうです」

使者は答える。アモナス口はエチオピアにとっては勇敢で頼りになる王でありエジプトにとっては長年の宿敵であった。そうした相手であった。

「彼自らテーベに迫っているのです」

「何と」

「これはまずいぞ」

大臣達も神官達も口々に言う。ファラオはそれを玉座から黙って聞いていた。

「テーベでは守りを固め国境に援軍を向けています」

「もうそこまでか」

「これはやはり」

「よし」

ファラオはここまで聞いて力強い言葉を出してきた。

「では今よりその悪辣なエチオピアを討つ勇者を呼ぼう」

「その勇者とは」

「ラダメス」

王は正面を見据えたままラダメスの名を告げてきた。

「ラダメス、出るのだ」

「はい」

ラダメスはその言葉に従いファラオの前に進み出てきた。そうして跪いて告げるのであった。

## 第一幕その五

「有り難き幸せ」

(何ということ)

アイーダはラダメスの姿を見て青い顔をしていた。

(ラダメスがエチオピアを、そしてお父様を)

アモナスロという言葉に顔を青くさせていたのだ。何と云っているのかわからなかった。

「これでいいわ」

アムネリスは一人ラダメスを見て満足そうに笑っていた。

「これでエチオピアは。そして私も」

「さあ、後で行くのだ」

ファラオはまたラダメスに声をかけてきた。

「我等が神ラーの神殿へ。よいな」

「はっ」

太陽を司る神である。エジプトにおいては主と呼べる神である。

「さあ、異邦の敵達を倒せ」

ファラオは厳かに告げる。

「そして聖なるナイルの岸边を守るのだ。よいな」

「はっ」

「ファラオよ」

ランフィスが口を開いてきた。

「我がエジプトの勇者ラダメスならば勝利は間違いありません」

「うむ」

ファラオは彼の言葉にこくりと頷く。

「その通りだ」

「戦士の運命と勝利は神々によって定められている。最早我がエジプトの勝利は疑いない」

「そうだ」

大臣達も他の神官達も頷いてきた。

「神々が勝利を約束してくれている。だからこそ」

「そうだ、敗北はない。勝利だけが」

（けれどエジプトの勝利は）

アイーダだけは違っていた。彼女にとってエジプトの勝利は祖国エチオピアの敗北なのだ。それは到底受け入れられるものではなかった。

（どうして。どうしてこんなことに）

「エジプトに勝利を」

ラダメスはまた言った。

「今ここに神々とファラオに約束します」

「うむ。それでは」

ファラオは今度は別の将校を呼んだ。

「あれを持って」

「はっ」

その将校は畏まって答えファラオの前から一旦姿を消した。そして暫くして軍旗を持って戻ってきた。

それをアムネリスに手渡す。するとアムネリスはそれを手にラダメスの前にやって来た。

「ラダメスよ、立つがいい」

ファラオは彼に言った。

「そして軍旗を手にするのだ。勇者として」

「わかりました」

ラダメスはその言葉に頷く。そして今その旗を手に取った。

（誰の為に泣き、誰の為に祈ればいいの？）

アイーダはラダメスがアムネリスから軍旗を手渡させるのを見ながら一人呟いていた。

（私はあの方を愛さずにはいられない。けれどあの方は敵であり異邦人である。それなのにどうして。どうして愛さずにはいられないの）  
その答えはない。それがさらに彼女を苦しませる。だがどうしよ



うもなかった。

ファラオは玉座から立った。そしてまた告げた。

「行くのだ。戦場へ」

「はっ」

ラダメスはそれに頷く。

「それでは陛下に勝利を」

「うむ、待っているぞ」

「ラダメス、誇り高き勇者よ」

神官や大臣達が彼に言う。まるで合唱のようだ。

## 第一幕その六

「戦うのだ。そして勝利を」

「エジプトに勝利と栄光を」

「その手に」

彼等は勝利を願っている。そのまま歓喜の声に包まれてファラオの前での話は終わった。しかしアイダは一人になると悲嘆にくれて言うのだった。

「勝つて下さい。何という残酷な言葉」

何かから顔を背けて言った。

「お父様に勝つて下さい、私の為に武器を手にしてここに来ようとしているお父様の為に。どうして私は祈れないの？いつも私のことを案じてくれたお父様を」

そのことを忘れることはない。何故忘れられようか。アモナス口はアイダにとっては心優しい父であり続けた。今もそれがはつきりと心の中にある。

「あの方が勝利しらならばエジプトの者達の歓喜の声の中あの方は戻って来られる。けれどその身体はエチオピアの者達の血で染まり後ろにはお父様が鎖につながれて……ああ！」

気が狂いそうになる。どうしてそう思えるのか。ラダメスと父王の間で今その心は散々になるうとしていた。

「お許し下さい、この愚かな娘を」

エチオピアの神々に対して叫ぶ。

「お父様の下に。けれどそれでは」

ラダメスから離れなくてはならない。それはできなかった。

「あの方のお側に永遠に。けれど……私はどうしたらいいの」

答えが見えない。光さえも。何も見えなくなってきた。

「お父様かあの方が。どちらも離れられない。こうなってしまった

私はどうすればいいの？いつそ」

不吉なものを心に抱いた。

「死んでしまいたい私の祈りが冒瀆となり涙が罪となるといつのな  
ら」

涙が落ちる。しかしそれは罪の涙だと。自分で思うのだった。

「希望もなく不吉な恐ろしい愛が私を離さない。神々よ、こんな私  
をお許し下さい」

一人嘆くしかなかった。救いのない嘆きの中を。彼女は今それから逃れられなくなっていた。自分でどうすればよいかわからなくなっていたのだった。

ラーの神殿。今ここにラダメスがいた。神秘に満ちた光が上から刺し込め長い柱廊が左右に何処までも続いている。システラーだけでなく人の身体に様々な動物の顔を持つエジプトの神々の像が並んでいる。何段もの厳かな高台の上に祭壇が設けられている。黄金色に輝くそこには祭具が置かれ香煙が立ちのぼっていた。

ラダメスだけではなかった。神官達もいる。イシスの大神官であるランフィスもそこにいて勝利を願っていた。

「さあ勇者よ」

祭壇に美しく着飾った乙女が現われた。ラーの巫女長である。

「私からそなたに告げましょう」

下に控えるラダメスに対して告げる。

「勝利を。そして」

「加護を」

神官達も告げてきた。

「その為に祈ろう、そなたの勝利を」

「我がエジプトを守る神々、全てを司る尊き方々」

巫女長の詠唱は続く。まるでそれ自身が神々の言葉であるかのよう  
うに。

「今こそエジプトに御加護を」

「宇宙と永遠の愛の神秘を今ここに」

神官達もそれに続く。

「我等の加護を」

巫女長は服を一枚脱いだ。そこから舞を舞いはじめた。

まるで神が舞い降りたかのような美しい舞であった。それが終わってからまたラダメスに告げる。彼女の左右に炎の篝火が現われた。

「さあ、勇者ラダメスよ」

澄んだ美しい声が響き渡る。

「今こそ行くのです」

「エジプトの為に」

神官達がまた言った。

「勇者よ」

ランフィスが彼に言う。

「神々の信頼を得たそなたにエジプトの運命は委ねられている。わかるな」

「はい」

ラダメスはその言葉に頷く。

「その神により鍛えられた聖なる剣で敵の霹靂、死となるのだ」

「そうだ」

他の神官達もそれに続く。様々な神の神官達が集っている。まるでエジプトの神々を代理するかのよう。

「神よ、この勇者に御加護を」

「そして敵を滅ぼして下さい」

「それでは今より」

ラダメスは彼等に応えて自らも誓う。

「エジプトの勝利と栄光を」

「ファラオの為に」

「神々の為に」

「エジプトの為に」

神官達も言う。彼等は今エジプトの勝利を誓い合う。ラダメスがエジプトの勇者達を率いてテーベに向かったのはそれからすぐのこと

とだった。アムネリスは晴れやかな顔で、アイーダは沈んだ顔で彼を見送るのであった。

## 第二幕その一

### 第二幕 凱旋

ラダメスが出征して暫く経った。まだ音沙汰はない。勝っているのか負けているのかもわからない。人々はそれを少し不安に思いはじめていた。

そんな中アムネリスはナイルの河畔で侍女達を周りにくつろいでいた。豪華な白い衣を着て化粧までしている。その中で彼女はいた。アイーダも一緒であった。

「王女様」

侍女達は椅子に安楽に座る彼女に声をかけてきた。

「何かしら」

「今日は優雅なものですね」

「そうですね」

アムネリスは彼女達の言葉に優雅に頷いた。彼女達にとってアムネリスは優しくよく気の利く優しい主人であった。少なくとも悪い主ではなかった。

「後は將軍が帰って来られるだけね」

「どうなのでしょうか」

「勝利は疑いがないわ」

にこりと笑ってそう答える。

「間違いなくね」

「左様ですね。それは間も無くだと思います」

侍女の一人が言う。

「エジプトの勝利が告げられるのは」

「その時は皆に私が祝いをあげるわ」

優雅に笑ってそう述べる。

「皆にね」

「宜しいのですか？」

侍女達はその言葉に驚きを見せた。

「私共なぞに」

「そのような」

「いいのよ」

しかしアムネリスはこう述べる。

「私にとって貴女達は次女でも奴隷でもないわ」

アイーダに言った言葉をそのまま彼女達にも言う。

「友人であり姉妹でもある。だから当然よ」

「有り難うございます」

「それでは」

「ええ」

侍女達に顔を向けてにこりと笑った。

「その時を楽しみにしていてね」

「そうですね。ところで」

ここで話を変えてきた。

「皆疲れたでしょう？休んではどうかしら」

そう侍女達に声をかけてきた。

「えっ」

「休んでって」

「休息よ。私の命令よ」

また彼女達に言う。

「だからね。いいわね」

「宜しいのですか？」

「あの、お側には」

「いいのよ」

しかしアムネリスはそう彼女達に述べる。

「わかったわね。それじゃあ」

「わかりました」

「では喜んで」

その言葉に應えて侍女達は姿を消す。アイーダも去ろうとする。

しかしアムネリスは彼女は呼び止めたのであった。

「待ちなさい」

「えっ」

「貴女にあげたいものがあるの」

優雅な笑みを表面に浮かべて述べてきた。

「いいかしら」

「わかりました。それじゃあ」

「ええ」

こうしてアイーダだけが残った。そうして二人並んでいた。

アムネリスは座っていてアイーダは立っている。アムネリスはそ  
中で言うのであった。

「いいかしら、アイーダ」

「はい」

アムネリスの言葉にこくりと頷く。ラダメスの出征以降顔が晴れ  
ない。それは今も同じであった。

アムネリスは横目にそんなアイーダを見ている。そして声をかけ  
るのだった。

「いいかしら」

「あの、それで」

「貴女への贈り物はね」

じっとアイーダを見据えて言う。言葉を続けてきた。

「エチオピアのことよ」

「エチオピアの!？」

「そう、貴女の祖国」

「私の祖国のことを」

それを聞いて顔を蒼ざめさせる。アムネリスはさらに言うのであ  
った、

「祖国は無事のようにね」

「そうなのですか」

そのことにまずは安堵した。



「そうなのですか」

「そうよ。それでね」

「ええ」

「私は他にも貴女にあげたいものがあるの」  
「今度は顔を彼女に向けてきた。」

「私にですか」

「ええ。何でも言いなさい」

「アイーダに告げる。」

「何が欲しいのかしら」

「それは」

（言いたい）

ラダメスのことを。だが言えなかった。

それだけではどうしても言えなかった。どうしてエチオピアの奴隷  
がエジプトの將軍に対して何が言えるのか。それを思うとどうしよ  
うもなかったのだ。

（けれどそれは）

（ふん）

そんなアイーダをアムネリスも見ていた。じつとその表情を探っ  
ていた。

## 第二幕その二

(やはり怪しいわね)

心の中でそう述べた。

(どうにも)

(あの方のことはかりを思ってしまうのに。どうして言いつとがで  
きないの)

(だとしたら彼女は私にとって)

(この苦しみから解き放れたい。けれど)

(恋敵。だとすれば)

「アイダ」

また彼女に優しい声をかける。

「何でも話しなさい。二人だけの秘密よ」

「王女様と」

「そうよ。私が嘘をついたことがあるかしら」

にこやかな笑みをアイダに見せてきた。

「ない筈よ」

「はい」

アイダもその言葉に頷く。確かにそれはその通りだった。アム  
ネリスは誰に対しても嘘を言うことはなかった。そうしたことは言  
わない、それは王女の誇りからだった。

「では言いなさい。祖国が心配なのね」

「そうです」

こくりと頷く。それは事実だった。

「けれど」

「けれど。何かしら」

「いえ」

首を横に振る。

「何もありません」

「隠し事をする必要はないのよ」

アムネリスはここで立ち上がった。

「だから。さあ」

「けれど」

「私は今悲しみを知ってしまいました」

(仕方ないわ)

嘘を言うことにした。今はじめて嘘をつく。そのことに心を痛ませるがそれでも言わずにはいられなかった。そうしてでも探りたかったのだ。

「悲しみとは」

「エジプトにとってかけがえのない勇者を失うという悲しみを」

「それはまさか」

「ええ、そうです」

その言葉に答える。

「そうなの。ラダメスはエチオピア軍によって」

「そんな……」

その言葉に思わず声を失った。

「あの方が、そんな」

(やはり)

これで確信した。それにより嫉妬の炎が燃え上がる。最早自分でもどうにもならない。その激情で身を焦がしながらまた言うのであった。

「死にました」

「ああ！何故！」

「悲しいのですね？」

アムネリスは嘆きの声をあげるアイーダに対して問うた。

「あの方の死が」

「はい」

今そのことをはっきりと認めた。

「どうして悲しまずにいられますよう」

「そう。わかったわ」  
「アムネリスは嫉妬に身を焦がしながら頷いた。」  
「わかったわ。そのうえで貴女に謝罪するわ」  
「謝罪!？」  
「ええ。これは嘘よ」  
「アムネリスは言った。」  
「嘘をついたことを謝罪するわ。王女としてはならないことをしたのを」  
「どうしてそのようなことを」  
「知る為よ」  
「きつとして言った。」  
「貴女のことを」  
「私のことを!？」  
「ええ」  
「きつとして睨み据えてきた。」  
「わかったのよ、今」  
「まさかそれは」  
「そうよ。嘘はつけないわよ」  
「きつとアイダを見据えていた。そのうえでの言葉であった。」  
「もうここまで来たらね」  
「うっ……」  
「私はもう嘘はつきません」  
「アイダに対して宣言してきた。」  
「私もまたあの方を愛しているのです」  
「えっ……」  
「今言いましたね。私もまたあの方を愛していると」  
「そんな……それでは」  
「私と貴女は敵同士」  
「アイダを睨み据えて言う。」  
「あの方を巡つての。ファラオの娘が貴女の敵なのです」

「あの方が生きています」

アイーダはまずはそのことに希望を見た。しかし。

「けれど貴女は」

「さあ、どうするのですか？」

「ずい、と一歩大きく前に出てアイーダに問い詰める。

「私と。闘うのですか？」

「ファラオの娘ですか」

「そうです」

毅然として言った。

「そうでなくても私はアムネリス」

ファラオの娘である前に自分自身であると。はっきりと述べてきた。

「この私と闘うつもりですか？」

「私は……」

「私は逃げることはしません」

凄まじいばかりの威圧感と気迫を見せてきた。アムネリスはファラオの娘である前にアムネリスであった。それがはっきりと出ていた。

「このアムネリスの名と誇りにかけて」

「それでも私は」

アイーダはその気迫に気圧されそうになる。それでも言った。負けてはいなかった。

「あの方を何処までも」

「私と闘うと」

「いえ」

また気圧される。それでも言った。

「私はあの方を何処までも」

「それは私も同じこと」

アムネリスは押ししていたがそれでもアイーダは踏み止まっていた。アムネリスはさらに押すがアイーダは持ち堪えていた。彼女はそれ

でも押すのであった。

「だからこそ」

「私にあるのは愛だけ」

アイーダは言った。

「その愛の為に」

「退かぬというのですか」

「貴女はファラオの娘でなくともと仰いましたね」

「ええ」

その言葉にこくりと頷く。アイーダを見据えたまま。全身に紅い炎が宿っていた。それはまさに怒りの女神そのものの姿であった。

### 第二幕その三

「その通りです。私はファラオの娘である前にアムネリスであります。そのアムネリスが全てをあの方に捧げようというのです。わかりますね」

「はい」

その言葉にこくりと頷く。

「わかります。ですが」

「ですが？」

「私もアイーダです。ですから」

「闘つと」

「若し御嫌でしたら今この場で死を」

こつまで言ってきた。

「悔やまれることのないよう」

「私は貴女を殺すことはありません」

それは断言してきた。

「誇り高き女には誇り高き闘いを」

アムネリスは告げる。

「ただそれだけのことです」

「それだけのこと……」

「貴女が奴隷であろうとなかろうと」

身体をアイーダからナイルの河畔に向ける。だが顔はそのまま

あつた。

「私は貴女と向かい合う。そして勝つ！」

「それは私が」

「ではその言葉受け取りましょう。貴女と私の闘いの言葉だと」

「うっ……」

アイーダは胸に左手をやり言葉を詰まらせた。遂にアムネリスと戦いになる。そのことに今気付いた。風が起こり二人の後ろの木が

ざわめきナイルの水が波になる。まるで二人のそれぞれの心が外に出たかのように。

「それでよいのですね」

「退かれることはないのですね」

「ありません」

またはつきりと告げてきた。

「何があるうとも」

「わかりました」

そこまで言われて遂に覚悟を決めた。

「それでは」

「はい。私は何があっても勝ちます」

アムネリスは再び身体もアイーダに向けて告げた。右手を前に素早く突き出してだ。

「貴女に対して」

そう告げた瞬間であった。勝利が告げられる声が出た。

「むっ」

「これは」

「勝った、勝ったぞ！」

伝令の声であった。そう叫びながら街を走っていた。

「エジプトの勝利だ！遂に勝ったぞ！」

「そうですね、勝ちましたか」

アムネリスはその声の方を向いて満足そうに笑うのであった。それからまたアイーダの方に顔を戻してきた。そのうえで言った。

「では私も勝つとしましょう」

今度は笑ってはいなかった。燃え上がる目でアイーダを見ていた。

「そして英雄として凱旋してくるあの方と共に」

「運命は何処までも私を苦しめる」

アイーダは顔と身体をナイルの河畔に向けて呟いた。アムネリスはまだ彼女に顔と身体を向けていた。

「このナイルはエチオピアにも流れているというのに」



所謂青ナイルである。エジプトを創ったナイルは遠くで青ナイルと白ナイルに別れている。青ナイルはエチオピアにも流れているのである。

「それでも今はエジプトにありエジプトの者を潤す。私を潤しはせず」

そのことを泣くばかりであった。悲しみが心を覆う。それを拭い去ることは彼女にはできなかった。

勝利の凱旋の日となった。エジプトの創造神であるアトウムの神殿の大きな階段の頂上に黄金色の玉座がありファラオはそこで着飾っていた。その上には緋色の天幕があり階段は天幕と同じ色の絨毯で覆われファラオの後ろにはみらびやかに着飾った将校達が並んでいる。それぞれの手には旗がある。階段には將軍達や大臣、神官達が並び王の前に横に並んで立っている。そして階段の下には民衆が並んでいた。皆軍の帰還を今か今かと待ちあぐねていた。

## 第二幕その四

アムネリスはファラオの左横に立っていた。彼女もまた緋色の服で礼装である。その後ろにはアイーダが俯いて控えている。今城の入り口の凱旋門の方から歓声が起こった。

「来たぞ！」

「誇り高き英雄が！」

民衆はその声を聞いて笑顔で声をあげる。そして凱旋門の方を一齐に見た。

誰かが叫ぶ。それはすぐに全員のものとなった。

「エジプトを守る神々に栄光あれ！ナイルを統べるファラオに楽しみ讃歌を！」

「今ここに！」

彼等は神々とその子であるファラオを讃えだした。

「勝利者達の髪に勝利の冠を飾りましょう！」

続いて女達と言う。

「武器を花で飾り勝利を祝いましょう」

「そして踊りを。天空で星達が太陽の周りを踊るように」

「そうだ」

神官達が民衆の声に応える。

「勝利を統べるいと高き神々に感謝を」

「この幸運なる日に」

彼等も言うのであった。

「偉大なる神々を讃えよ！」

「我等を守護されるファラオに！」

口々に言う。そこで高らかな笛の音が鳴った。それは軍の曲であった。

軍の曲に合わせ楽手達が来た。皆誇らしげに音楽を奏でながら整然と行進する。

「来たぞ！」

「英雄達が！」

民衆は誰もが彼等を見てまた歓声をあげる。

「勝利者達が！」

「我等の誇りが！」

続いて舞妓達がやって来て華麗な舞を舞う。その華麗な舞に見惚れていると遂にその戦士達が来た。

戦車に乗り武器を構えている。神器に神像が同時にある。それを飾りながら前に進む。すべてエチオピアからの戦利品である。その中で黄金色の戦車に乗り黄金色の鎧と緋色のマントを羽織ったラダメスが遂にやって来た。

「あの方が」

アムネリスはその姿を見て満足そうに笑う。

「遂に来られたわ」

「遂に」

アイーダは彼の姿を見て顔を俯けさせる。

「エチオピアを破って」

「ラダメス万歳！」

民衆達はラダメスに対して叫ぶ。

「我等が英雄！」

「誇り高き勇者よ！」

ラダメスは無言で彼等に応える。そして歓呼の声の中戦車から降りて神殿の下からファラオに対して跪く。ファラオまでの道は既に開けられていた。ファラオはその道から彼を見下ろしていたのであった。

「ラダメス將軍よ」

ファラオは玉座から彼に対して声をかけてきた。厳かな声であった。

「よくぞ勝った」

「有り難き御言葉」

ラダメスはその言葉に礼を述べる。

「そしてだ」

ファラオはまたその彼に声をかける。

「まずは立て」

「わかりました」

ラダメスを立たせる。そのうえで話をまたしてきた。

「褒美は何がよいか」

そうラダメスに問う。ファラオは微動だにしない。

「申してみよ。好きなものをやろう」

「私が好きなものを」

「そうだ」

その厳かな声をまた出してきた。

「この王冠と玉座に誓おう。そして神々にも」

絶対ということであった。ファラオとしての誇りをかけてきたのだった。

「今それを誓う」

「それではファラオよ」

ラダメスは自分の上にいるファラオを見上げて述べてきた。

「お待ち下さい」

だがここでアムネリスが父に声をかけてきた。

「何だ、娘よ」

玉座から娘に顔を向けて問う。

「何用だ」

「まずは英雄に冠を」

「うむ、そうであったな」

ファラオは娘のその言葉に頷いた。それから左右の者達に対して述べた。

「それではあれを」

そう告げる。

「持って参れ」

すぐに冠が持って来られた。それは薔薇の花と緑で飾られた冠であつた。それがアムネリスの手に手渡された。

## 第二幕その五

「それでは今から」

「はい」

父であるファラオに対して一礼する。それから階段の下のラダメスのところに向かう。その後ろにはアイーダもいた。

ラダメスはアイーダの方を見た。アムネリスはそれに気付くが何も言わない。アイーダは俯いている。この間にも火花が散っていたのである。

「將軍」

アムネリスはそのことを消してラダメスに声をかけた。

「今この冠を貴方に」

「有り難き幸せ」

ラダメスはそれに応え再び片膝をつく。その黒く光さえある髪に今紅と緑の冠が飾られたのであった。それこそが英雄の証であった。

「それでは將軍よ」

冠が授けられ終わるとまたファラオが声をかけてきた。

「立つがよい」

「はっ」

その言葉を受けてまた立つ。ファラオはまた彼に問うた。

「それでは褒美は何がよいか」

「はい、まずは」

ラダメスはそれを受けて話しはじめた。

「捕虜達をここに御願います」

「捕虜をか」

「宜しいでしょうか」

「うむ」

ファラオはそれを許した。特に問題はないと判断したからであった。どのみち捕虜は凱旋の最後に来ることになっていた。だから問

題はなかったのだ。

その言葉通り捕虜達が連れられてきた。アイーダはその中の一人を見て驚きの声をあげた。

「お父様！」

「何っ」

ラダメスはそれを聞いて自身も驚きの声をあげた。

「父だと」

「何という因果か」

それを聞いた人々は思わず声をあげた。アイーダはその間に父の側に駆け寄る。

黒い肌がっしりとした身体の大男であった。髪も目も黒い。彼はエチオピアの士官の鎧と服を身に纏っていた。名をアモナス口と  
いう。

「どうしてここに」

「アイーダ」

アモナス口はそっとアイーダに囁いてきた。

「私の身分を明かすな。よいな」

「はい」

父の言葉にこくりと頷く。アモナス口こそエチオピアの王である。アイーダはその娘、即ちエチオピアの王である。そういうわけなのであった。

「わかりました」

アイーダはそれに頷く。そのうえで父の側にいたのであった。

「そうか、そなた等は父娘だったのか」

ファラオは玉座からアモナス口に問うた。仇敵に見下るされ激しい怒りと憎しみを感じたが今は消した。そのうえで答えるのであった。

「そうです」

低い声できつぱりと述べた。

「私はこの娘の父です。まさかこうしてここで出会うとは思いません

んでしたが」

「そうだったのか」

二人はエジプトの言葉で語り合う。だがアモナス口の正体は誰も知らない。知っているのはアイーダだけ、他の者は誰も知らないのであつた。

「我等が王と祖国の為に戦いましたが」

話の最初は嘘である。

「しかし運命は我等に味方です。こうした次第です。王は立派な最後を遂げられました」

「まことか」

ファラオはそれを聞いてラダメスに顔を向けた。そのうえで彼に問うた。

「それは」

「行方は知れませんでした」

ラダメスはそう答える。

「しかしそれがまことならば」

「我等が王はもうおられませぬ」

アモナス口はそう告げる。

「ですが我々はここにいます」

そして次にこう言った。

「我々は」

「その通りだ」

ファラオもそれに頷く。

「そなた達は確かに今ここにいます」

「はい、その私達からの願いです」

アモナス口はそうファラオに呼び掛けた。

「我等に寛容を」

「寛容をか」

「そうです」

アモナス口はファラオを見上げて言う。



「どうかここは。是非共」

「そうです」

他の捕虜達も言う。鎖に繋がれているがそれでも言うのだった。

「どうかここは」

「ファラオの寛容を」

「ファラオよ」

ランフィスがファラオに顔を向けてきた。首だけだったが身体が大きく捻られていた。

「なりません。この者達は奴隷にするか処刑しましょう」

「その通りです」

他の神官達も言う。

「然るべき賠償がない限りは。ここは」

「ふむ」

ファラオは彼等の言葉を聞き左手を顎に当てた。そのうえで思案の顔を浮かべてきた。

「奴隷にすべきかと」

「御慈悲を」

だが捕虜達は諦めずに彼に訴えかける。

## 第二幕その六

「どうかここは」

「なりません」

神官達も引かない。あくまで言う。

「ここはどうか」

「鎖か剣を」

鎖ならば奴隷、剣ならば処刑だ。そういうことであった。

「御慈悲を」

「なりませぬ」

彼等の攻防は続く。しかしここで民衆が加わった。

「ファラオよ」

彼等もファラオに訴えかけてきた。

「ここは寛容を」

「御願いします」

彼等は捕虜達に同情を示してきた。それは神官達の日頃の独善と強権を知っているからである。だからこそ彼等についたのだ。

「せめて彼等の命だけは」

「どうか」

そうファラオに対して嘆願する。

「御願いします」

アイーダは父の側に寄り添って言う。

「どうか私の国の者達を」

「助けて欲しいのか」

「そうです」

ファラオに対して述べる。

「御願いですから」

「アイーダ」

ラダメスはそんな彼女をずっと見ていた。アムネリスはその視線

に気付いた。

「やはりあの方は私ではなく」

まずは悲しみに心を覆われた。

「あの女を。やはり」

次に嫉妬に覆われた。これが彼女の不幸のもとであるがそれには今は気付かなかつた。気付くのは後悔に打ちひしがれた時であつた。

「ファラオよ」

アモナス口はまたファラオに声をかける。決して誇りを失つてはいない。その声を今敵の王にかけるのであつた。そこには彼なりのエチオピアの王としての誇りと意地があつた。

「どうかここは」

「なりません」

しかしランフィスも言う。

「せめて奴隷に」

「いえ、それも気の毒です」

民衆達もまた言う。

「御慈悲を」

「御願いします」

「わかつた」

彼等の言葉を全て聞いたうえで決断を下してきた。

「我等は勝つた」

顔を上げてまずそれを宣言する。

「はい」

皆がそれに頷く。それは事実だつた。

「それでは勝利者は寛容でなくてはならぬと思うが」

「ですが」

「いや」

ランフィスが何か言おうとすると今まで何も言わなかつた大臣達が動いてきた。既にラダメスの周りには軍人達がいる。

「ファラオの言われることはもつともであります」

「全くです」

形勢が有利になったと見て彼等は捕虜達の助命に動いたのである。日和見を決めていたがここでようやく判断を下したのであった。

「だからこそ」

「そなた達も賛成なのだな」

「そうです」

「ここはファラオの寛容さを御見せする時です」

彼等は口々に述べる。

「宜しいでしょうか」

「馬鹿な、敵に慈悲なぞ」

それでもランフィスは反対しようとする。

「何の意味もない。ここは果断であるべきだ」

「お待ち下さい」

ラダメスも言ってきた。

「將軍」

ランフィスが彼を見下ろすと既に將兵は彼の周りにいた。それがどういふことなのか、わからない彼ではなかった。

「私はファラオの御遺志に従います。いえ」

一旦首を振って述べる。

「私もその考えです」

アイーダをちらりと見た後で述べた。その僅かな動きもアムネリスは見ていた。胸の痛みと憎しみに耐えられなくなっていたが今はそれを必死に隠していた。

「將軍、馬鹿な」

「慈悲は快いものとして神々に届きエジプトとファラオに幸福をもたらすでしょう」

「その通りだ」

ファラオもラダメスの言葉に満足した顔で頷く。

「だからこそだ。よいな」

「そしてファラオよ」

この機会を待っていたかのようにラダメスが一步進み出てきた。片膝をつき恭しく述べる。

「私の願いです」

「何だ？」

「どのような名譽も財産もいりませぬ」

「いらぬと申すか」

「はい、私が欲しいのはファラオの慈悲です」  
頭を垂れそう述べてきた。

「貴方の御慈悲こそが」

「そしてその願いは」

「捕虜達の解放です」

「馬鹿な、そんなことをすれば」

ランフィスはそれに首を横に振った。

「またエチオピア軍は攻めて来る。何の解決にもならない」

「ですがランフィス殿」

ラダメスはここで立ち上がった。ランフィスを見上げて言う。

「敵の王アモナス口は死んだではないですか。彼さえいなくなれば」  
「將軍」

ランフィスは決してラダメスが憎くはない。むしろその才と私のない純真な心を愛している。彼個人としてはラダメスにはいとおしささえ感じている。しかし彼としては認められなかったのだ。その立場と考えから。彼もまた自分に対して、自分なりにエジプトに対して嘘はつけなかった。

## 第二幕その七

「聞くのだエジプトの誇りよ、人の心には怒りと憎しみがある」  
「はい」

ラダメスもそれに頷く。それは彼もわかっている。

「それは承知しているつもりです」

「ならば何故だ」

「それでもだ」

「慈悲は神々の教えではないのですか？」

「うっ……」

この言葉にはランフィスは逆らえなかった。彼は神に全てを捧げているからだ。

「確かにそうだ」

怯みながら答えた。

「それでは」

「わかった」

彼も遂に折れた。しかしまだ言った。

「しかしだ。平和と安全の証がいる」

「それは」

「確かにあの強猛なアモナス口は死んだ」

彼もそれを信じていた。

「しかしだ。人質もまた必要なのだ」

現実的な案と言えた。彼はこの時彼なりにエジプトのことを考えていた。

「それはわかると思うがな」

「この者をですか」

アモナス口をエチオピア王とは知らずに見てから問う。

「そうだ。それが条件だが」

「お父様」

「よい」

アモナス口は囁いてきたアイーダに囁き返した。

「それならばな。よい条件だ」

こう述べてきた。

「人質一人で済むのなら」

「それでは將軍よ」

ランフィスはまたラダメスに問うてきた。

「それでよいな」

「はい」

ラダメスは謹厳な顔でランフィスの問いに答えてきた。毅然として顔を上げているのはそのままである。ランフィスもまた毅然として彼を見ていた。二人の視線がぶつかっていた。

「それで。不平はございまん」

「わかった。ではファラオよ」

ランフィスは彼の言葉を受けてファラオに顔を向けてきた。彼はそこに座ったままやり取りを見守っていたのだ。

「このように宜しいでしょうか」

「よい」

ファラオは彼の言葉に追うの威厳を以って応えた。

「それでよいぞ。それならばエジプトの安全も保たれる」

「わかりました」

「寛大なファラオに栄光あれ！」

「これこそが王者の慈悲！」

兵士と民衆達はそれを聞いてファラオを絶賛した。彼は自身へのその声を姿勢を崩すことなく聞いていた。彼はここでも王者であった。

その王者の口がまた開く。そしてラダメスに問う。

「そしてだ」

「はっ」

主に対して頭を垂れる。その彼に対して告げる。

「その人質であるが」

「私が」

アムナスロが出て来た。

「お父様」

「よい」

また娘に囁いた。

「私に考えがある。よいな」

「お考えが」

「そうだ」

娘に囁いて告げる。その顔は真剣なものであった。

「だからだ。御前は何も案ずることはない」

「ですが。何か得体の知れない胸騒ぎが」

「父に任せるのだ」

不安を隠しきれず眉を顰めさせ右手の平を自分の胸に添える娘に  
対して述べた。

「ここはな。よいな」

「わかりました」

その言葉に頷くことにした。

「それでは」

「うむ、よいな」

「はい」

こくりと頷く。アムナスロは娘とは違い轟然とした顔であった。

彼もまた王者としての威厳をそこに漂わせていた。しかしそれに気  
付く者はアイーダしかいなかったのであった。

「私で宜しいでしょうか」

「そなたがか」

「そうです」

敵の王に対して告げる。

「私一人の犠牲で同胞達が救われるのならばそれでいいのです」

「よいのか、それで」



ファラオは彼に問う。

「そなたは死ぬまで祖国に帰られぬかも知れぬのだぞ。それでも」  
「望むところです」

口元に微笑みさえ浮かべてきた。実際にその決意は本物であった。  
「ですから」

「わかった」

その言葉を聞いてファラオもまた断を下した。

「では人質はそなたにする。よいな」

「はっ」

ここで片膝をついて一礼する。

「有り難き幸せ」

「これでまずは終わった」

「ええ」

ランフィスがその言葉に頷く。

## 第二幕その八

「これで完全に」

「それでだ。ラダメスよ」

ファラオはあらためてラダメスに顔を向けてきた。ラダメスはそのファラオを見上げる。姿勢はその瞬間に正されていた。

「そなたの望みは適えた」

「有り難うございます」

「しかしじゃ。わしからも褒美をやりたい」

「褒美ですか」

「そなたの功に感謝してな。エジプトのファラオとして」

こう彼に告げる。告げながら自身の娘であるアムネリスを見ていた。

「アムネリス」

そして彼女に声をかけた。

「はい」

「そなたの夫が決まったぞ」

「私の主人が」

アムネリスはそれを聞いて思わず喜びの声をあげた。

「それは一体」

「エジプトの誇りだ」

それを聞いて誰なのかわからない者はいなかった。アムネリスの顔は歡喜に満ちラダメスの顔は強張った。アイーダの顔は今にも割れんばかりになった。三者三様で顔が変わったのであった。

その三人の顔にはやはり誰も気付かない。皆それに気付かずファラオの言葉を待つ。

「ラダメスよ」

ファラオは次にラダメスの名を呼んだ。

「それでよいな」

「ええ」

ファラオの言葉である。拒めはしなかった。だがこの言葉によりアイーダの心までもが割れんとしていた。

「そんな、私は」

「どうすればいいのだ」

ラダメスも思わず一人呟く。

「私が欲しいのはアイーダだけだというのに。玉座には」

「これで勝ったわ」

アムネリスは勝利を喜ぶ顔で恋仇を見据えていた。

「あの女に。私は遂に」

「あの方には栄光と玉座、私には忘却と絶望の涙が」

「これは雷なのか」

アイーダもラダメスもそれぞれ呟く。

「アイーダだけが欲しいというのに」

「さあファラオよ」

三人のことは知らぬランフィスはここでは良識ある男として笑顔でファラオに顔を向けてきた。

「祝おうではありませんか、我がエジプトの勝利を」

「うむ」

ファラオはそれに応えて笑顔になる。そしてここで立ち上がった。

「全てのエジプトの者達よ」

大臣にも将兵にも民衆にも語り掛ける。

「この勝利を心から祝おう。そして」

「神々に捧げ物を」

「我等に恵みを」

「そうだ、恵みは思いのままだ」

ファラオという存在は実は気前のいいものであった。ナイルが荒れ農耕なぞできはしない季節にはピラミッドの建設で職を与えていたのだ。ピラミッドの建設では衣食住は保障され労働者達は楽しい日常を過ごしていたのである。これは王の慈悲の一つとされていた

のだ。

「皆の者、祝え」

命令でもあつた。

「今日のこの日を。よいな！」

「ファラオ万歳！」

「エジプトに栄光あれ！」

歓呼の聲に包まれる。しかしその中でアイーダは浮かない顔をしている。だがそこにアモナスロがやって来て声をかけるのであつた。

「娘よ」

「お父様」

「どうしたのだ、一体」

「いえ」

後ろから自分の両肩を優しく抱く父に対しても項垂れたままであつた。

「何でもありません」

項垂れたまま述べる。

「そうか。しかしだ」

そんな娘の心の中まではわからないがそれでも言った。

「案ずることはないぞ」

「どうしてですか？」

「わしに考えがあるのだ」

「お父様に？」

「そうだ、エチオピアを救う為にだ」

彼は王として語っていた。それは今のアイーダには届かない言葉だつたがそれには気付かない。

「その為に。見ているのだ」

「そうですか」

「だからだ」

優しい声と顔になる。父のものであつた。

「案ずることはないぞ、御前は」

「わかりました」

一応はその言葉に頷く。しかし。

（もう私の幸福は）

ラダメスのことしか考えられなかった。だがもう彼を見ることさえできなくなっていた。

（何処にも）

（何故神々は私からアイーダを）

ラダメスもまた同じであった。項垂れて歓呼の声の中にいた。

（奪っていくのか。ただ一つ欲しいものだというのに）

「將軍」

そんな彼にアムネリスがにこやかに声をかけてきた。

「王女様」

「もうすぐ私は王女ではなくなります」

ことさらにこやかに述べる。

「貴方の妻に」

「私の妻に」

「そうです。宜しく御願いますね」

「はい」

項垂れるのをなおしてこくりと頷く。

「わかりました」

「私は今全ての幸福を手に入れました」

項垂れるアイーダを見て言った。

「この世にある全ての幸福を」

歓呼の声は自分に向けられているのだと感じながら。今そこに彼女は悠然として立っていた。項垂れるしかないアイーダを見据えながら。

## 第三幕その一

### 第三幕 裏切り

ラダメスとアムネリスの婚姻が決まった。勝利の美酒から醒めたエジプトは今度は婚姻の美酒に酔おうとしていた。人々はその用意に追われていた。

それはアムネリスも同じであつた。彼はラダメスと結ばれる日を思い婚礼の準備にあたっていたのだ。

ナイルの岸边にあるイシスの神殿の一つ。岩を背にして川辺には椰子の木々が生い茂っている。世界は夜の濃厚な紫苑の世界になつており淡い黄色の月明かりとそれと共に瞬く星が空に見える。そこに一艘の舟が着いた。

「ここですね」

「はい」

ランフィスが先に降りアムネリスの手を取る。そうして彼女に言うのであつた。

「ここでございます」

「偉大なる女神イシスの神殿」

その花崗岩の岩達を後ろに建っている白い神殿は月明かりを受けてそこにあつた。アムネリスはその明かりを自分への光だとさえ思っていた。

「何と美しい」

その光を見て言う。

「この光は」

「イシスの光です」

側に控えるランフィスが応えてきた。

「偉大なるイシスの」

イシスに仕える者として当然の言葉だつた。彼はさらに言う。

「イシスは全てのことを知る存在。人の心の全てを」

「そう、ラダメスに対する私の思い」  
それを今述べた。

「それは真実です」

「その真実を今祈るのです」

ランフィスはまた述べた。

「夜が明けるまでその心が実るように」

「はい」

彼女はランフィスと共に神殿の中に入る。従者達も。そこにアイダが来た。彼はラダメスがここに来ると聞いてここにやって来たのである。

「ここにあの方がおられる」

ラダメスを探しながら呟く。

「けれど御会いしてもその口から語られる言葉が若し」

不吉なことが胸の中をよぎる。

「そうなれば全てを終わらせるだけね。ナイルの暗く深い渦の中で  
そつとナイルの河畔を見た。言葉が出る。

「永遠の休息と平和、忘却。全てがそれで終わるのなら」  
だがここで故郷のことを思い出した。

「さようなら、私の故郷。青い空と優しいそよ風」

それが今アイダの心の中を支配する。異郷の紫苑の中にいながらも故郷の空を想うのだった。

「輝くばかりの清々しい朝に緑の丘に匂うが如き河の岸边」

故郷が思い出される。それをまた述べる。

「あの家にも帰ることができない。我が故郷にはもう二度と」

「アイダよ」

そこにアモナス口が来た。奴隷の服を着ている。

「お父様、どうしえここに」

「用があつてここに来た」

彼は王の顔でアイダに語ってきた。その服は奴隷のものであったが顔は王のものであった。彼は何を着ようと王であった。それ

だけだ。

「それは一体」

「御前はあのエジプトの將軍を愛しているな」

「いえ」

その言葉には一旦顔を背ける。

「そのようなことは」

「隠さなくてよい」

しかし彼は一旦はそれを許した。一瞬父としての顔も混ざった。

「わかる。しかしだ」

「わかっています」

アイーダは父から顔を背け俯いて述べる。その整った眉が険しく歪んでいる。

「それは。ですが」

「止められぬのか」

「はい」

父の言葉にこくりと頷く。アモナス口はまた娘に対して述べる。

「ファラオの娘じゃ」

今度はこう言うのだ。

「ファラオの娘が御前の恋敵じゃ。わかっておるな」

「わかっています。けれど」

「倒せ」

アモナス口は強い言葉で述べてきた。

「あの娘を。それは可能なのだぞ」

「無理です」

しかしアイーダはそれを否定する。

「そんなことは」

「いや、できる」

しかしアモナス口はそれを否定する娘にまた述べた。

「できるのだ。祖国と愛を両方取り戻すことができる」

「まさか」



その言葉に驚き父に顔を向ける。目を大きく見開いていた。

「そんなことが」

「父を信じるのだ」

アモナス口はそう娘に告げる。

### 第三幕その二

「この父を。そうすれば」

「そうすれば？」

「薫る森林も爽やかな谷間を見ることがもできるぞ」

「森も谷も」

「そうだ」

娘に強い声でまた言う。

「あの黄金色の神殿もな」

「私達の神々が座すあの神殿が」

「もう一度見たいだろうか？」

娘の顔をじつと見る。それで言うのだった。まるで娘をそこに導くかのように。

「森も谷も神殿も」

「ええ」

アイーダはその言葉にこくりと頷いた。

「必ずや。夢に何度見たことか」

「ではわかる筈だ」

アモナス口はさらに娘に告げる。

「御前ができることを」

「それは一体」

「そして思い出すのだ」

また言ってきた。

「エジプトの者達が何をしたのかを」

「エジプトが」

「そうだ」

父の顔から王の顔になった。意識していなくともそうなっていた。彼は父であり王でもある。そうした存在なのである。だから当然であった。

「我等の家々も神殿も壊し尽くしたな」

「はい」

王の言葉にこくりと頷く。それは事実だった。エジプト軍との戦いの中でエチオピアの領土も荒れ果てた。その時に父とはぐれたアイーダもさらわれ奴隷にされたのである。それを忘れたことも一日たりともない。

「女をさらい母も子も老人も殺した」

「覚えています」

アイーダは沈痛な声で答えた。

「全てを」

「だからだ」

王としてアイーダに告げる。

「我々は勝たなければならん」

「エジプトに。けれど」

「ラダメスを忘れられぬのか？」

「いえ、それは」

言葉を詰まらせる。しかしそれは真実だ。アイーダは自分に対しても他人に対しても嘘をつくのが得意ではない。だから言葉を詰まらせてしまったのだ。

「そうです」

それを自分でも認めた。

「ですがそれでも」

「勝利の方法はある」

アムナスロは言う。

「それも誰もが傷つかぬものじゃ」

「それは一体」

「間道だ」

王はエジプト軍の通る道を述べてきた。

「今まで何故負けたのか、エジプト軍の動きを読めなかったのだ」  
「動きを」

「そうだ。だからこそ彼等の通る道を知りたいのだ」  
そうアイーダに述べる。

「どの間道なのかな。わかるな」

「ええ」

その言葉にこくりと頷いた。

「けれどそれは」

「見つけることはできる」

アモナス口はそうアイーダに告げる。目の光が鋭く、強いものになる。その目はやはり王のものであった。父のものは消え去ってしまっていた。

「それはどうやって」

「わしは鍵を持っている」

アイーダを見据えて言う。

「それは御前だ」

「私が……」

「そうだ」

また言うのだった。

「あの男、ラダメス」

アイーダが愛している相手。その男の名をまた口に出してアイーダに聞かせる。

「あの男がエジプトの猛者達を率いている。わかるな。」

「わかります」

その言葉にこくりと頷く。

「では私を」

「その通りだ」

はつきりと告げる。やはり王として。

「頼めるな、御前に」

「そんな……」

王の言葉に顔を青くさせる。そのうえで震えてきた。

「そんな恐ろしいことはとても」

「できぬのか？」

「お許し下さい」

頭を垂れて慌てた感じで言う。

「そんなことはとても」

「ならばよい」

アイーダの言葉を聞いて突き放してきた。口調が険しく、それでいて鋭いものになる。それはまるで大きな、鋭い刃を持つ剣のようであった。王の剣だ。

### 第三幕その三

「それならばエジプトの者達が我等が国を焼き尽くす」

「エチオピアを!？」

「そうだ、我等が祖国をな」

またそれを言う。心の奥にまで言うように。

「彼等に勝つことはできぬ。決してな」

「ではエチオピアは」

「終わりだ」

またアイーダに告げる。

「滅ぼされる。美しい国が我等の血で赤黒く染まる」

「そんな……」

その言葉はアイーダを絶望に追いやるのに充分であった。愕然として倒れんばかりになる。しかしアモナス口はそんな娘を許しはしない。さらに言うのだった。

「国には人がいなくなり亡霊だけが満ちる」

「ああ！」

「その者達がそなたに言うだろう。国を滅ぼした女だと」

「何と恐ろしい……」

「恐ろしいな？」

一瞬で父の顔になった。

「祖国を滅ぼしたくはないな」

「はい」

恐ろしさに身を震わせながらこくりと頷く。

「それだけは。何があっても」

「そうだ」

優しい顔になっていた。その顔で述べる。これは芝居ではなかった。王である彼と父である彼が共にいる結果であった。それだけのことだった。

「ファラオの奴隷ではないな？」

「ええ」

父の言葉にこくりと頷く。

「私はお父様の娘」

顔を上げて言う。

「それ以外の何者でもありません」

「ではいいな」

「わかりました」

また父の言葉に頷く。

「それでは」

「頼むぞ」

娘を包み込むようにして囁いた。

「エチオピアの為にな」

「エチオピアの」

「そうだ、祖国の為に」

アイーダに対して言う。

「よいな」

「わかりました、いいな」

「はい」

王の言葉にこくりと頷く。頷いた言葉は苦渋に満ちたものになっていた。だがそれを拒むことはアイーダにはできなかった。エチオピアの者として。

「お任せ下さい」

「うむ」

アモナスロはその場を後にした。そうしてアイーダ一人になった。アイーダ、遂に見つけた

そこにラダメスがやって来る。そして彼女に声をかけてきた。紫苑の静かな夜の中に二人だけとなる。その中で二人話をするのであった。

だが彼女はラダメスから顔を背けている。彼の顔を見ようとはし

ない。

「どうしてここに」

ラダメスに対して問う。

「王女様は」

「私が見たいのは御前だけだ」

今自分の気持ちをはっきりと述べてきた。

「だから御前を今」

「嘘です」

アイーダは顔を背けてラダメスに言った。

「それは。だから」

「いえ、嘘です」

しかしアイーダはそれを否定する。

「貴方は私を愛してはいない。だから王女様と」

「そなたへの想いは本当だ」

それでも彼は言う。顔が必死なものになっていた。

「偽りの誓いで御自身を穢されてはなりません」

そうラダメスに告げる。やはり顔は背けたままであった。

「決して」

「偽りの誓いだ」と

「私は誇り高き方を愛そうとしました」

ラダメスから顔を背けたまま言う。

「けれど偽りの誓いを述べる人を愛そうとしたことはありません」

「ではどうすればいいのだ」

ラダメスはその彼女に問う。

「私は」

「どうされるのですか？」

ここで顔をラダメスに向けてきた。そのうえで彼に問うてきた。

「王女様もフアラオも祖国も。どうされるのですか？」

「聞いて欲しい」

アイーダの目をじっと見て言う。



「私はまた戦場に赴くことになった」

「戦場に!?!」

「そうだ、エチオピアの戦士達はまた立ち上がった」

そうアイダに述べる。実はエチオピアでは新しい王が立ったのである。言うまでもなくえいーダの血縁の者である。彼女はそれが誰かすぐにわかった。

「兄上が」

ふと呟いた。

「今何を」

「いえ」

その言葉は誤魔化した。また顔を背けさせた。

### 第三幕その四

「何でもありません。気にされないで下さい」

「そうか。そしてだ」

ラダメスはまた自分の言葉を語りはじめた。じつとアイーダを見据えている。

「私は勝つ、その時にそなたを手に入れたい。永遠にだ」

「永遠に」

「そうだ、ファラオに誓う。そなたを永遠の伴侶とすることをだ。いいか」

「王女様の復讐を避けられるのですか？」

また顔を向けてラダメスに問うてきた。

「雷のように全ての上に襲い掛かるその復讐を」

「大丈夫だ」

ラダメスは毅然としてアイーダに述べてきた。

「私が護る。だから」

「無理ですわ」

またしても顔を背ける。背ける度に痛む心に耐えながら。

「貴方でもそれは。出来る筈がありません」

「ではどうしろというんだ」

アイーダに対して問う。

「私でそなたも皆も護れないとなると。どうすれば」

「いえ」

これまでになく辛い顔でラダメスの方を振り向いた。今にも壊れそうな顔になっていた。その顔でじつとラダメスを見やる。そして言うのだった。

「私を愛して下さるのなら」

「そなたを愛せば」

「一つだけ救いの道が開けているのです」

「それは一体」

「逃れるのです」

顔を背けそうになるのを必死に堪えて述べた。心が痛むがそれでもそれを堪えるのであった。今彼女は苦いもので心を満たしていた。

「このエジプトから」

「エジプトから」

「そうです」

そうラダメスに告げる。

「木々と花々が香り緑溢れる場所へ」

「祖国と神々を捨ててか」

「そうです。私を愛して下さるのならば」

じっとラダメスを見上げて言う。

「できる筈です、絶対に」

「栄光を讃える月桂樹の葉を生み出すその地をか」

「そうです」

またラダメスに告げる。やはりその目は彼から離れない。悲しみも辛さも必死に隠しながら。彼女はラダメスに対して言うのであった。

「この青い空を離れるというのか」

「私の祖国へ」

「エチオピアへ」

ラダメスはその言葉に俯く。

「行けというのか。エジプトの敵の場所へ」

「御願いです」

ラダメスの目から己の目を離さずに述べる。

「神々はそれを認めて下さいます」

「だが私の神々は」

エジプトとエチオピアでは当然ながら神々も違う。それもまた両者の戦いを生み出しているのである。全てが戦いを生み出していたのだ。

「エチオピアへ」

「私は全てをエジプトに捧げてきた」

ラダメスの声が震えていた。震えながらも言う。

「これからも。だが」

「私を愛しては下さらないのですか？」

言うだけでも身が引き裂かれそうになる。それでも言わなければならなかった。

「それでは」

「愛している」

その気持ちに偽りは無い。どうしてそれを否定できようか。ラダメスのその心は本物だった。アイーダもそれはわかっているのだ。しかし。

「嘘です」

こう言うしかなかった。どうしてもだ。

「嘘だから貴方は今動こうとされないのです」

「帰って下さい」

最も言いたくはなかった言葉を遂に出した。

「もう貴方に言う言葉はありません」

「どういふことだ」

「私を愛して下さらないからです」

ラダメスに対して言う。言葉も表情も壊れそうになるがそれでもそれに必死に耐えながら言葉を続けるのであった。痛みに耐えながら。

「ですから」

「ならば……いや」

アイーダからは顔を背けはしない。しかし苦い言葉を述べた。

「私はそなたを」

「それでは」

「……わかった」

アイーダから目を離さず遂に苦い言葉を口にした。

### 第三幕その五

「共に行こう。運命だけが支配する荒野に」

「いえ、私の祖国へ」

アイーダはそうラダメスに言う。

「共に参りましょう」

「いや、それは」

ラダメスはそれだけは拒もうとする。祖国への罪は犯そうとはしなかった。それだけではできなかった。今の彼は。しかしアイーダは言うのだった。

「緑の満ちる国へ」

「果てしなく続く砂漠の先で砂を床として二人だけの場所を目指すのだ」

それがラダメスの願いだった。せめてもの。

「星達が澄み切った輝きで導くままに。それでは駄目なのか」

「香りに満ちる祭壇と花の芳香に満ちた大地の中で二人の喜びを」

「駄目だ」

エチオピアに寝返ることだけは拒む。どうしても。

「爽やかな谷間と緑の平野を婚礼の場所として。そして二人で」

「それだけは」

ラダメスはそれを拒む。

「それだけは」

「では仰ってください」

「何をだ？」

「貴方が何処を使ってエジプトを出られるおつもりなのか」

「道をか」

「はい」

そこが問題なのであった。エジプト軍が通る道でもあるからだ。アイーダはそれを聞き出そうとしていた。本意に反して聞こうとし

ていた。

「宜しいですか？それだけは」

「わかった」

最早エジプトを出るつもりであった。その伴侶に今道を教える。それだけの筈だった。

「ナパタだ」

彼は言った。エジプトとエチオピアの間にある峡谷である。そこを言ってきた。

「そこには明日までは人が配されてはいない。そこを使えば」

「よいのですね」

「そうだ」

ラダメスは言った。

「そこを使えば」

「よし、そこか」

「!?!」

その声に気付き顔を向ける。あの大柄な黒い肌の男が出て来た。

「貴殿はエチオピアの人質の」

「そうだ」

ラダメスの前に現われて述べてきた。

「私はアイーダの父にしてエチオピアの王だ」

「馬鹿な！」

ラダメスはそれを否定する。エチオピア王は死んだ。その筈だった。

「王は死んだ筈だ。どうして」

「それは私が言ったことだったな」

「ではまさか貴方は」

「その通りだ。君は今我々にそれを教えてくれたのだ」

「それでは……」

強張った顔でアイーダを見る。アイーダの顔が今壊れようとしていた。

「い、いえ」

狼狽する顔でラダメスに述べてきた。

「私は。その」

「そんな……では私は」

「信じて下さい！」

「我が娘アイーダの愛は本物だ」

アモナス口はそれは誓ってきた。

「だからこそ私は娘に頼んだのだ。王としてな」

「貴方が王ということはアイーダは」

「そうだ、エチオピアの王女だ」

アモナス口の口から発せられた言葉はラダメスの全身を撃った。

雷のように全身を貫く。

「馬鹿な、そんなことが」

「いや、これは紛れもなく事実だ」

アモナス口はさらに言う。王者の威厳がそれを真実だと述べていた。

「私とてエチオピアの王だ、ここはその誇りにかけて言う」

「何故このようなことを」

「それはわかると思うが？」

ラダメスを見据えて言う。

「エチオピアの為だ。貴殿がエジプトの為に戦うのと同じだ」

「ではアイーダ、君は」

「私は……」

堪えられなかった。ついラダメスから顔を背けた。

「私は陥れられたのか、今」

「違いますっ」

アイーダはそれを必死に否定する。慌ててラダメスに顔を戻した。

「それは違います」

「祖国エジプトを裏切ってしまった」

「いや、違う」

アモナス口も言ってきた。

「貴殿は愛を選んだ、それだけだ」

「愛を選びエジプトを裏切った」

生真面目なラダメスにはそうとしか思えなかった。そのことを悔やみ今絶望の中へと落ちようとしていた。それを止めることができなくなっていた。最早誰にも。

「さあ行こう」

アモナス口はラダメスを誘った。

「エチオピアへ」

「どうか私と共に」

「行くことはできない」

しかしラダメスはそれを断った。

「私は祖国を裏切ったのだから。だから」

腰にある笛を出してきた。兵を呼ぶ笛だ。

「私は私を罰する。それだけだ」

「まさか貴殿は」

「そうです」

アモナス口に顔を向けて述べる。



### 第三幕その六

「自らの罪を裁きます。それでは」

「よせつ、止める」

「私と一緒に」

「アイーダ、貴女の愛はわかっている」

ラダメスはアイーダに顔を向けて言った。毅然としながらも優しい顔で。

「貴女の気持ちも。だが私は」

「エチオピアには行かれないのですね」

「この世で我等が結ばれることはない」

ラダメスはこう告げた。

「だから。さらばだ」

「ああっ！」

ラダメスは大きく笛を吹いた。吹き終わると笛を持つ手をゆっくりと下にやった。そうして穏やかな顔のままアイーダとアモナス口に対して言った。

「さようなら」

「どうして……どうしてこんなことを」

「愛を捨てて罪に服するというのか」

「そうです。だからこそ」

「見事だ」

アモナス口はラダメスのその行動を見て言った。だがその顔は苦いものになっていた。

「貴殿のような勇者がエジプトにいたこと、そしてわしの為に消えねばならんとは」

「これも運命です」

遠くから兵士達の声が聞こえてきた。

「敵か！」

「誰だ！」

「謀反人だ！」

ラダメスは兵士達の声に顔を向けて叫んだ。

「早くここへ！」

「わかりました將軍！」

「今そちらへ！」

兵士達の声が近づく。ラダメスはそれを背景にアイーダとアモナス口に向かい合った。さつきまで夜だというのに明るかった紫苑の世界は何時の間にか何処までも暗くなっていた。闇になっていた。

「さあ、行くのです」

「あくまでここに留まるか」

「そうです。ですから」

アモナス口に応えて彼に行くように言う。アイーダを見て微笑んでいた。

「アイーダ、貴女も」

「ラダメス様、どうして貴女は」

「所詮私達はそれぞれの国の運命から離れられぬ身」

微笑みのまま涙を流すアイーダに告げた。

「これでよいのです」

「そんな……」

「アイーダ」

アモナス口が娘に対して声をかけてきた。

「御前まで失うわけにはいかぬ。行くぞ」

「お父様、私は」

「行くのだ、この若者の心を知れ」

そう娘に言う。彼はラダメスの心がわかったからこそ逃げることを決意したのである。

「よいな」

「………わかりました」

アイーダも遂に諦めた。彼女もラダメスの心がわかっていった。そ

して父の言葉もわかっていたからだ。それで従わない程彼女は勝手な女ではなかった。

「それでは」

「さらばだ」

「はい」

アモナスロはアイーダを連れて別れた。すぐに闇の中へ消えた。

「追え！」

「逃がすな！」

ようやくやって来た兵士達が彼を覆うとする。アムネリスとランフィスもそこに来ていた。

「エチオピアの人質が逃げたか」

ランフィスはラダメスのところにやって来て言った。

「將軍、御無事か」

「ええ」

ラダメスは一旦は彼に対して頷いた。

「ですが謀反人を捕らえました」

「謀反人！？それは何処に」

「將軍しかおられません」

兵士達はラダメスの言葉に辺りを見回す。松明の光に映るのはエジプトの者だけである。

「それは私だ」

「馬鹿な」

ランフィスもアムネリスも兵士達もそれを否定した。

「貴方が謀反人なぞ」

「おたわむれを」

「いえ、だからこそ私は今笛を吹いたのです」

しかしラダメスはその彼等に言う。

「私は敵の王に間道のことを教えました。これこそが私の謀反です」

「馬鹿な、ではあの捕虜は」

「アモナスロ王だったのか」

「はい」

そうランフィス達に頷く。

「ですから罪に服しましょう」

「嘘よ、そんなことは」

アムネリスは剣をランフィスに差し出すラダメスを見て言う。

「將軍、貴方がそんな……」

しかしラダメスは答えない。そのままランフィスにその身を預けるだけであった。彼は今覚悟を決めていたのであった。それはアムネリスにもどうしようもないものであった。

## 第四幕その一

### 第四幕 永遠の抱擁

ラダメスは捕らえられた。彼は一切の弁明をせず取調べは順調に進んだ。このままいけば彼は軍事機密を漏らした罪で死刑であった。しかし彼は弁明をしないのであった。

このままでは死刑は間違いない。アムネリスはそのことに焦っていた。

裁判の神殿の前で彼女は一人やつれた姿でいた。ラダメスのことを想い眠ることすらできなくなっていたのだ。食事も碌に喉を通らなくなっていた。

「何ということ」

彼女は一人呟く。

「あの方はこのままでは死罪になる。それなのに弁明をしない」  
そのことに焦りと不安を抱いていたのだ。それを止めることができ  
ない。

「けれどもあの女と逃げようとした。エジプトを去り」

怒りも混じる。心は複雑であった。

「裏切り者……私を裏切ろうとした」

俯いて己の半ば開かれ指を曲げた手の平を見る。目が大きく出て  
血走っている。その顔はまるで幽鬼のようですらあった。その顔こ  
そが彼女の今の不安と焦燥の証であった。

「裏切り者には死を」

怒りを含んだ声で言う。

「いえ、あの方は私のもの」

しかしそれはすぐにラダメスへの愛に戻った。

「あの方も私を愛して下さるのならそれで私はあの方を救える。神  
官達に言つて」

その全てを賭けてラダメスを助けようとしていた。アムネリスも

まだ純粹にラダメスを愛していたのだ。その気持ちは本物であった。そこにラダメスが来た。兵士に連れられている。だが兵士達は彼の今までの功績と人徳から決して疎かな扱いにはしていない。縄もかけず周りを囲んで進むだけである。アムネリスはその彼を見た。

「將軍っ」

「私はもう將軍ではありません」

しかしラダメスはアムネリスにそう告げた。

「ですから」

「いや、そなたはまだ將軍だ」

そこにランフィスもやって来た。そのうえでラダメスに対して言う。

「名譽は剥奪されてはいない。そして皆そなたを信じている」

「大神官……」

「何かの間違いであろう」

じつとラダメスを見て言う。

「そなたが裏切ったなぞ。申してみよ」

「そうです」

アムネリスもランフィスに励まされるようにして言った。

「眞実を。そうすれば」

「弁明すればそなたは助かるのだ」

二人はラダメスに対して言う。

「だからこそ」

「言つて下さい」

「そうです、將軍」

兵士達も彼に言ってきた。ラダメスを囲んで。

「どうかここは」

「そうすれば神官の方々も」

「私はお父様に御願いします」

アムネリスは切り札を出してきた。

「ですから」

「いや、私は確かに間道のことを言ってしまった」

しかしラダメスは彼等の言葉をあくまで受けようとはしなかった。顔を上げてはいるがその言葉を全て遮ってしまっていた。

「それは事実です。ですから」

「騙されたのであろう」

ランフィスのその言葉通りであった。

「それでは致し方ない。間違いは誰にもある」

「一言だけ仰れば助かるのです」

「ですから」

「今の私には命を永らえる意味はない」

アムネリスの言葉も兵士達の言葉も彼は受けようとはしなかった。

「死こそが」

「死んではなりません！」

アムネリスはこれまでにない強い声でラダメスに対して言った。

「貴女は私の夫になるべき方、貴方を愛して永遠に貴方と共に」

「そのお気持ちは有り難いです」

それがわからぬラダメスではなかった。わかっているのだ。しかし彼は自分を偽ることができなかったのだ。アイーダを愛するといふその気持ちを。彼はアイーダを裏切ることも偽りの愛でアムネリスを傷つけることも、両方を拒んだのだ。その結果としての死でもあったのだ。

## 第四幕その二

「全てを貴方に。祖国も玉座も命を」

「私は祖国もフアラオも裏切ったのです」

やはりラダメスはそれも受けなかった。

「その私にとって残されたのは死だけ。アイーダの待っているあの世界に行くだけです」

「アイーダは生きています」

アムネリスは彼に告げた。

「生きていますか」

「はい。戦いの中でエチオピアに逃れ今は兄王のところにあります」

「そうだったのですか」

「アモナス口王は死にましたが」

「死んだのは王と兵士達だけ」

アムネリスはそうラダメスにまた告げる。

「彼女は無事だったのです」

「わかりましたら」

「ですから」

それを話したうえでまた言う。

「ここは弁明を」

「そうじゃ」

またランフィスが言ってきた。心から心配する顔で彼に声をかけるのであった。

「そうすれば命も名誉もそのままじゃ」

「將軍、ですから」

「それさえわかればいい」

しかしラダメスはここで穏やかに笑うだけであった。全てを悟り見極めたかのような達観した微笑みがあるだけであった。ラダメスは最早満足していた。



「最早悔いはない」

「悔いはない!？」

「ではそなたは」

「はい」

驚いた顔で蒼ざめるアムネリスとランフィスに告げる。

「最早救いは必要ありません」

「死が救いだと言いたいのだな」

ランフィスは険しい顔でラダメスに問う。

「そなたは」

「そう捉えて下さって結構です」

顔を見上げてランフィスに返す。

「それで」

「もうすぐ裁判だ」

ランフィスはそれでもラダメスに言う。

「それでもいいのだな」

「私には何も残っていませんので」

「大神官」

アムネリスと兵士達は彼にすがってきた。頼れるのは彼しか残っ

てはいなかった。

「貴方の御力を」

「御願いします」

「わかっている」

ランフィスは険しい顔のまま彼女達の願いに頷いた。

「だが。それでも」

「難しいのですか」

「この者が何も言わなければな」

彼は歯を噛み締めて述べる。最早何もかもが苦しく、重い空気に

満たされてしまっていた。ただ一人、ラダメスだけは。彼は無言で

そこに立っているだけであった。

「では行こう」

ランフィスはラダメスと兵士達に告げた。

「いいな、裁きの時間だ」

「はい」

ラダメスはそれに頷く。そうしてその足で祭壇の中に入る。アムネリスはその彼を壊れそうになる顔で見送っていた。空は暗くなり暗雲で満ちてしまっていた。

「ああ、もうすぐ」

祭壇の中へ入っていく神官達を見て声をあげる。彼等が裁判官を務めるのだ。

「どうして逃げないの、何故弁明しないの」

ラダメスに対する言葉であった。

「そうすれば助かるのに。どうして」

「王女様」

「こちらでしたか」

そこに侍女達が来た。そうして主の周りに来た。

「あの方がもうすぐ」

アムネリスは彼等に顔を向けて言う。

「このままでは」

「ですが」

「裁判の場に入られるのは裁判官の方々と裁かれる者だけ、ですから」

「それでも私は」

アムネリスは神殿を見やる。行きたいがどうしても行けなかった。侍女達が懸命に彼女を止めていたのである。それで動くことができなくなっていた。

「神々よ」

神殿の中からランフィス達の声が聞こえてきた。裁判の前の詠唱である。

### 第四幕その三

「我等が上に降り立ち永遠の光の輝きを以って我等を力づけ給え。我等の唇で貴方達の裁きを知らせ給え」

神々への誓いである。神官達の誓いはそのまま神々への誓いになる。そういうことであつた。つまり裁きには絶対の力があるということなのである。

「ラダメーリース、ラダメーリース」

神官達が彼への尋問を開始した。その声が神殿の外にまで響き渡る。

「そなたは我がエジプトの秘密をエチオピアにもたらせたのか」  
ラダメスに問う。

「どうなのか？」

「間違いではないのか？」

神官達は誘導にかかった。彼等もできることならエジプトの誇り高き英雄を救いたかつたのだ。彼等もまたラダメスをよく知っておりその人柄も能力も愛していたのだ。

「間違いならば言え」

「過ちを認めればこれまでの功により罪は問われぬ」

彼等はこちらも言ってきた。しかしラダメスは答えない。

「答えぬのか？」

「罪になるのだぞ？」

念を押す。しかしラダメスは答えようとはしなかった。

「それでは御主は」

「罪になる」

彼等もそう判決せざるを得なかった。神殿の中からのその言葉に  
アムネリスは倒れ伏した。

「そんな、このままでは」

「王女様」

「御氣を確かに」

侍女達が彼女を助け起こして言う。しかしその言葉は耳には入らない。ただ暗雲の中で響き渡る絶望的な裁きの言葉に顔を蒼ざめるだけであった。

「このままでは」

「脱走しようとしたのか？」

神官達はまたラダメスに問う。

「そなた程の勇者が」

「信じられぬが」

神官達はここでも助け舟を出した。ランフィスも同じであった。

「そんな筈がないな」

彼はラダメスに対して問う。

「そなたのような勇敢な男が」

「その通りだ」

他の神官達も言った。

「これは何かの間違いだ」

「そなたは」

しかしラダメスはこれにも答ええない。やはり沈黙を守ったままだった。

「答えぬのか」

「ならばこれも」

「また……罪が」

アムネリスはまた絶望に覆われる。ラダメスは答えようとはしない。あくまで罪に服そうとする。わかっていたことだが彼女に受け入れられるものではなかった。

「最後の裁きだ」

ランフィスはラダメスに対して告げた。

「そなたは国を裏切ったのか？ファラオも」

あえて名誉とは言わなかった。ラダメスの名誉を守ってのことだった。

「どうなのだ？」

「今までのことも含めて言ってみよ」

「黙っては何もならんのだぞ」

必死にラダメスの言葉を引き出そうとする。それは絶望的な努力であった。そう、絶望的なものであった。やはりラダメスは答えなかつたからだ。

「やはりか」

「では致し方ない」

神官達も諦めるしかなかった。彼等は言った。

「判決を下す」

「裁きが。遂に」

アムネリスは顔を上げてその言葉に顔を向ける。向けずにはいられなかつた。

「ラダメス、そなたは地下の墓所に生きてまま埋められる」

ランフィスが裁きを彼に下した。

「だが將軍として、エジプトの英雄としての名誉はそのままとする。その証として剣を最後に与えよう」

そこで自害をせよとのことだった。せめて名誉の死を与えたのである。

「わかつたな。では裁判は終わりだ」

「被告人ラダメス將軍は死刑」

「地下墓所で自害せよ」

「自害………死！」

アムネリスはその言葉に思わず立ち上がった。

「そんな………どうしてあの方が」

「王女様、仕方ありません」

「將軍が望まれたことですから」

「私は望んでなぞいません！」

泣いて侍女達に叫ぶ。

「あの方の死なぞ。誰が望みますか！」

「ですが」

「それでも」

「わかっています」

頬に滴り落ちる涙をそのままに承える。歯を噛み締めていた。

#### 第四幕その四

「けれど……何故……」

崩れ落ちる。そのうえでまた叫ぶ。

「私はあの人と一緒にいたいただけなのに！神々はそれを受け入れてくれないというの！」

「女王様」

そこにランフィスが戻ってきていた。そしてアムネリスに声をかけてきた。

「これが運命なのです」

「運命……何と残酷なもの」

「はい……」

項垂れてアムネリスに答える。

「全ては神々の……」

「惨たらしい神々……」

アムネリスは顔をあげた。そしてまた言う。

「何処までも無慈悲で。どうして」

「神々を恨んではなりません」

ランフィスは彼女に言葉を伝える。

「ですが。將軍の冥福を祈ることは」

「それだけが……」

「はい」

ランフィスは頷いてきた。

「それだけです。できるのは」

「わかりました」

アムネリスは立ち上がった。そうして述べた。

「それではそうします」

「宜しいでしょうか」

「あの方のことは永遠に」

顔を上げる。涙は流れたままだがそれでも言うのだった。

「私の心の中に。そうなのですね」

「はい、それでは」

「喪服を用意しなさい」

アムネリスは侍女達に顔を向け告げた。

「そうしてそれを着て」

「ええ」

侍女達もそれに応える。そうして彼女は彼女の愛を成就させようとしていた。彼女もまた愛を抱いていた。そのことに嘘偽りはなかったからだ。

ラダメスは地下の墓所に入れられた。そこで將軍としての鎧と剣を与えられた將軍として、エジプトの英雄として自害せよというラ  
ンフィスの氣遣いであったのだ。

「ここが私の墓場」

彼は辺りを見回して述べた。

「過ぎた墓場だな。そして」

腰の剣を見る。見事なものであった。

「これで自らを終わらせる。過ぎたことだ」

覚悟はしていた。後は誇り高い死を自身で果たすだけであった。

今それにかかるうと腰の剣を抜いた。だが。

「むっ」

そこに誰かの姿が見えた。ラダメスは最初それを見ていぶかしんだ。

「幻か」

最初はこう考えた。

「まさか」

「いえ」

しかしその幻が声を出してきた。そしてラダメスの前にその姿をゆっくりと現わしてきたのだ。それは間違いなくアイーダであった。「アイーダ、どうしてここに」



「わかっていましたから」

彼女はそつとラダメスのところにやって来て言った。

「全てが。だから」

「馬鹿な、それでもどうして」

ラダメスは呆然としてアイーダに語る。あまりのことに我を失おうとしていた。

「祖国に帰ったのでは」

「私にとって祖国は貴方です」

顔をム上げて言う。

「貴方しか。そして二人で」

「それは駄目だ」

ラダメスは首を横に振った。そしてアイーダに言う。

「逃げるんだ、ここから」

「どうしてですか？」

「私の為に死ぬことはない」

そうアイーダに告げる。

「私なぞの為に。そんなことは」

「いえ、全ては決めたのです」

だがアイーダはそれを聞こうとはしない。まるで何かに取り憑かれたかのように。

「ですから」

「いや、それは駄目だ」

ラダメスはまた首を横に振る。そうして扉へと向かう。だがそれは開きはしない。

「そうだったな」

ラダメスはその閉じられた扉を見て力なく笑う。全ては彼が望んだことだったのだ。

## 第四幕その五

「私は命を捨てていた。だから」

「私もです」

アイーダはまたラダメスに告げる。

「貴方と共に」

「ではいいのか」

「御聞きになつて下さい」

上を見上げてラダメスに声をかける。

「声が。聴こえてきます」

「うむ」

ラダメスはそれに頷く。確かに上から清らかな声が聴こえてきた。

「この声は。私への歌だ」

「貴方への」

「廣大無辺なる神よ」

巫女達の声が聴こえてくる。

「この世に命を与える神々よ」

「エジプトの神々の言葉だ」

「エジプトの」

「だが。同時に私達の天国を祈つてくれる神々だ」

そうアイーダに告げる。

「天国の平和へ」

「私達の天国へ」

「いいのだな？」

またアイーダに顔を向けた。そのうえで問う。

「私と共に」

「決意は変わりません」

アイーダはこくりと頷いて述べる。その巫女達の声を後ろにラダメスに告げる。

「ですから共に」

「わかった。それでは」

ラダメスは遂に最後の決意をした。もう言うことはなかった。

「共に行こう、いいな」

「はい」

「さらば大地よ」

「さらば涙の谷よ」

二人は顔を見合わせる。そして最後の祈りを二人で行った。

「共に死後の幸福へ」

「そこで永遠の幸せを」

アイーダはそう言いながら懐から何かを取り出してきた。それは小さな瓶であった。

「これに毒があります。私はこれで」

「私はこれを」

ラダメスは剣を出してきた。

「これでそなたと共に」

「参りましょう」

「天国の平和にな」

「ええ。永遠の平和に」

「共に」

今死へと向かう二人。その上ではアムネリスが巫女達と共にいた。喪服を着て下を見詰めている。じつとそこから目を離しはしない。

「永遠にさようなら」

最後にラダメスに告げた。

「貴方とは。何時か幾度も生まれ変わってきて」

「王女様」

巫女の一人が彼女に声をかけてきた。

「何？」

「宜しいのですね」

怪訝な顔で彼女に問う。気遣う声で。

「エチオピアの王女が中へ」

「構いません」

アムネリスは彼女に答えて述べる。じっと下を見ながら。

「あの方への想いが。だから」

「そうですか」

「報われなくても。実らなくても」

唇を噛み締めて言う。全てに耐えながら。

「それが愛だから。ですから」

「そうなのですか」

「皆歌って」

そのうえで巫女達に告げる。

「あの方の為に。何時までも」

「わかりました」

「これで。さようなら」

涙がこぼれる。それは石の床の上に落ち下の世界へと滲み込んでいく。まるで天国へと旅立つ二人を清めるかのように。何処までも澄んだ、それでいて悲しい涙であった。

アイーダ 完

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0313g/>

---

アイーダ

2011年4月28日00時35分発行